

鮑照「蕪城賦」における廢墟

西川 ゆみ

はじめに

「白楊早落し、塞草前衰す。」

この二句は、劉宋の鮑照「蕪城賦」の一節である。「蕪城賦」は題のごとく、荒れた街を題材とした作品である。南は蒼梧郡、北は長城を望む位置に、昔榮華を誇った都市があった。人々は、豊かな生活を謳歌し、宮殿を建て、都市の守りを固め、この繁榮が未來永劫續くよう願った。しかし五百年後、一轉して見る影もない廢墟になってしまう。道路や井戸に蔓や葛がつたい、壇上や階段には獸がうろつき、虎が肉を食って血を滴らせている。荒れた光景を見渡せば千里の向こうまで、土煙が舞うだけである。あまりの慘狀に心を痛めていると、在りし日の華やかな様子が蘇ってくる。しかしそれもすべては夢のあと。如何ともしがたく琴を取り出して「蕪城の歌」を歌う、といった内容になっている。

はじめに擧げた二句は、「蕪城賦」の後半、廢墟の場面に見える。昔整備されていた道は崩れて塞がれ、動物や物の怪が跋扈する。そして人の手が入らないために、草木は伸び放題になっている。その草木の中に、「白楊」と「塞草」とを数える。

しかしこの廢墟が以前都市であったことを考えると、ここに「白楊」と「塞草」が生えていることは奇妙ではないか。「白楊」と聞けば連想される「古詩十九首」を見ると、この木は、城壁の外に廣がる墓地に立っている。「塞草」は素直に解釋すれば、邊境を守る城塞に生える草である。かつての都市に生えるはずのない植物が、この廢墟には存在する。つまり「蕪城賦」の廢墟は、ただ荒廢している場所という以上の様相を見せている。

「蕪城賦」の中には、樂府や五言詩を思わせる表現が多數見受けられる。鮑照の傳に古樂府を能くした、という記述がある。また、六朝期において、鮑照は邊境の戦いを歌う詩人として認識されていた。彼の賦作品を考察していくのに、五言詩をその比較対象とすることは、意味のあること

とだと思われる。

一、「白楊」と死者の回想

一章では、まず「白楊」に着目し、それが持つ死や墓場のイメージについて考えていく。さらに、死を題材とする挽歌にも目を向け、その中に見られる「回想」の構造が、「蕪城賦」にも見られることについて論じる。

「白楊」は、『毛詩』や『楚辭』には見られない植物であり、古くは文學作品に取り上げられない植物であった。その後、漢代に盛んに制作された賦作品にも「白楊」は見られない。³「蕪城賦」は、賦のジャンルでありながら、「白楊」を作中に用いた珍しい例なのである。むしろ「白楊」は「古詩十九首」に見られるように、主に五言詩に用いられた言葉だと言える。⁴

「古詩十九首」のうち、「白楊」を詠みこんだ作品は二例ある。

其の十三

驅車上東門	遙望郭北墓	車を驅る	上東門	遙望す	郭北の墓
白楊何蕭蕭	松柏夾廣路	白楊	何ぞ蕭蕭たる	松柏	廣路を夾む
下有陳死人	杳杳即長暮	下に陳死の人有り	杳杳として長暮に即く		

（「古詩十九首」、『文選』卷二十九）

街の中から車を驅つて上東門を出る、出て邊りを見渡すと、はるかに城壁の北に墓が見える。その墓場の中に「白楊」が立ち、「蕭蕭」と風に吹かれている。墓に植える松や柏が道を挟んで生え、その下に死人が埋まっている。墓という死人の埋まる場所に「白楊」は生える。「死」と直結する植物なのである。また、次の例も「白楊」を描寫する手法は、ほぼ同じである。

其の十四

出郭門直視	但見丘與墳	郭門を出でて直視すれば	但だ見る丘と墳と
古墓犁爲田	松柏摧爲薪	古墓は犁 ^{うが} かれて田と爲り	松柏は摧 ^{くだ} かれて薪と爲る
白楊多悲風	蕭蕭愁殺人	白楊 悲風多く	蕭蕭として人を愁殺す

（同右）

門から出て見える墓場、そこに「白楊」が立ち、風に吹かれるそのさまが、「蕭蕭」と人の心を悲しませる。

さらに陶淵明の「挽歌詩」にも、「白楊」が見える。挽歌に詠われる植物であることから、「白楊」は確かに死のイメージを帯びた植物と言えるだろう。

荒草何茫茫 白楊亦蕭蕭 荒草 何ぞ茫茫たる 白楊 亦た蕭蕭たり

嚴霜九月中 送我出遠郊 嚴霜 九月中 我を送りて遠郊に出づ

(晉) 陶淵明「挽歌詩」、『文選』卷二十八

自身が死者となつて出棺される場面である。荒れた草はぼうぼう、白楊は「蕭蕭」、霜降る九月に私を遠く郊外へと送っていく。「白楊」は、この「挽歌詩」でも「蕭蕭」と形容されている。「蕭蕭」とは、風の吹くさまや草木が風に吹かれる様を表す語³である。「白楊 亦た蕭蕭たり」は、「古詩十九首」其の十三の「白楊 何ぞ蕭蕭たる」を受けた表現であろう。また陶淵明の作品では、特に「嚴霜九月中」と言い、風の寒々しさに、さらに霜による「寒さ」を付け加えている。

五言詩において「白楊」とは、墓場に立ち、蕭蕭と吹かれる木であり、時には霜降る季節にその寒々しい姿を見せる。そしてその背後には常に「死」をおわせている。

では「蕪城賦」には、「白楊」はどんな姿を見せているのか。都市が見る影もないほど荒廢した情景の中にあつて、「白楊」は早くもその葉を落としている。

崩榛塞路 崢嶸古廬 崩榛 路を塞ぎ 古廬に崢嶸たり

白楊早落 塞草前衰 白楊 早落し 塞草 前衰す

稜稜霜氣 薊薊風威 稜稜たる霜氣 薊薊たる風威

密生したイバラが道を塞ぎ、かつての大通りは薄暗く、凍てつく霜と厳しい風の中に、「白楊」が立っている。そして「蕭蕭」とは言わないものの、五言詩と同じく風が吹く様子が直後に述べられている。また「霜氣」について言及しており、陶淵明の「挽歌詩」と同様霜と風両方の「寒さ」が描かれている。つまり、五言詩で用いられる「白楊」の語が見られるだけでなく、その形容のされ方も、五言詩と類似しているのである。「蕪城賦」の「白楊」も、墓場に生える木、「死」を想起させる植物として捉えられるだろう。

また「蕪城賦」より少し遅れるが、劉宋の謝莊の「孝武帝哀策文」⁵にも、「白楊」の語が見られ、死を悼む際に描かれるのにふさわしいと考え

られていたことが確認される。またこの作品も、「白楊」と霜と風をともに詠んでおり、五言詩と共通した描かれた方であることが指摘できる。それでは「白楊」のほかに、「蕪城賦」に「死」と関連する表現は見られないだろうか。挽歌というジャンルには、特徴的な對句表現が見られる。現存するもつとも初期の挽歌作品である魏の繆襲の「挽歌詩」は、「生時は國都に遊び、死没して中野に棄てらる。」（『文選』卷二十八）と始まり、對句によつて生前と死後の落差を鮮烈に對比している。また挽歌の多くは、先に見た陶淵明の作品のように、死者の立場から死を描く。そうした作品においても、生前―死後を並べる對句が見られ、それによつて死者の「回想」とも呼ぶべき、過去と現在の交錯する瞬間を創出する。その對句は、「昔は、今は」と表現されることが多い。

昔居四民宅 今託萬鬼隣 昔は四民の宅に居り 今は萬鬼の隣に託す

昔爲七尺軀 今成灰與塵 昔 七尺の軀爲り 今 灰と塵と成る

金玉素所佩 鴻毛今不振 金玉 素より佩ぶる所 鴻毛も今は振わず

（晉）陸機「挽歌詩三首」其二、『文選』卷二十八

昔在高堂寢 今宿荒草鄉 昔 高堂に在りて寢ね 今 荒草の郷に宿る

（陶淵明「擬挽歌辭」其二、『箋注陶淵明集』卷四）

葬儀が進められる中で、死者がふと生きていた昔を回想するように、この對句がはさまれる。上の句で住んでいた住居、裝飾品などの所有物、自身の肉體を擧げる。それらすべては死者が生きていた時、確かに實感として持っていたものである。そして下の句で、所有していたものが、なくなってしまったことを述べる。つまり上の句で過去を思い起こして、下の句で現在を振り返る。この對句は、挽歌の詩句にあつて、死による喪失感をもつとも明確に印象付ける。

鮑照の「代挽歌」には昔―今という對句は見られないとはいえ、同様の「回想」表現を見出すことができる。

獨處重冥下 憶昔登高臺 獨り處る 重冥の下 憶う昔 高臺に登るを

傲岸平生中 不爲物所裁 傲岸たり 平生の中 物の裁く所と爲らず

埏門只復閉 白蟻相將來 埏門 只だ復た閉じ 白蟻 相い將に來らんとす

生時芳蘭體 小蟲今爲災 生時 芳蘭の體 小蟲 今は災と爲る

玄鬢無復根 枯體依青苔 玄鬢 復た根づく無く 枯體 青苔に依る

憶昔好飲酒 素盤進青梅 憶う昔 飲酒を好み 素盤に青梅を進むるを

(鮑照「代挽歌」、鮑氏集卷七)

この「代挽歌」の死者はもう埋葬されている。墓穴の中で、生きていたころ登った「高臺」、飲んでいた「酒」、そして「芳蘭の體」を回想する。死者の回想はかつて所有していたものへと向かう。自身の身體が蟲に食われている以外に、今現在の描寫はないが、「回想」というその行爲自體が、現在の喪失を浮き彫りにしている。死者はもう二度と高臺に登り、酒を楽しむことはできない。「回想」は、挽歌作品において、死による喪失感を際立たせる働きをしていると言える。

「蕪城賦」では、氣味の悪い動物怪物が蠢き、植物が蔓延する荒涼たる町の様子に、突如絢爛豪華な都市の姿が現れる。

若夫藻局黼帳 歌堂舞閣之基 若し夫れ藻局黼帳 歌堂舞閣の基

璇淵碧樹 弋林釣渚之館 璇淵碧樹 弋林釣渚の館

吳蔡齊秦之聲 魚龍爵馬之玩 吳蔡齊秦の聲 魚龍爵馬の玩

皆薰歇燼滅 光沈響絕 皆薰歇き燼滅え 光沈み響絶ゆ

東都妙姬 南國佳人 東都の妙姬 南國の佳人

蕙心執質 玉貌絳唇 蕙心 執質 玉貌 絳唇

莫不埋魂幽石 委骨窮塵 魂を幽石に埋め 骨を窮塵に委ねざる莫し

引用した部分は、漢賦に詠まれた都城を思わせる。班固「西都賦」(『文選』卷二)では、宮殿を描寫する部分で、「珊瑚碧樹、阿を周りて生ず。」と、宮殿を取り圍む「碧樹」を描いている。また、司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)では、宴の音楽について、「荆吳鄭衛の聲、韶濩武象の樂」という表現をしている。壯麗を極めた建築や調度品、各國の音楽そして美女。「蕪城賦」は、都市の過去を述べる時、漢賦で用いられたような語を敷きつめている。この一節があることで、都市の榮華が、残らず滅び去ってしまったことが再確認される。

過去に所有したものを舉げて、それが今は喪失してしまったことを述べる。殺伐とした荒廢の情景に、突如現れる漢賦を思わせる一節は、「挽歌」的回想と言えるのではないだろうか。

二、「塞草」と邊境の情景

次に、はじめに挙げた句「塞草 前衰す」の「塞草」に、考察の対象を移そう。「塞草」と、「蕪城賦」の終盤に見える「邊風」、この二つの言葉を軸に、邊境の風物として描かれる「沙」「霜」「蓬」などが、「蕪城賦」の情景に見えることに着目する。なお、比較する詩作品については、鮑照が邊境を歌う詩を評價される詩人であり、また鮑照以前に同様の題材を描く作品が少ないため、主に鮑照自身のものを扱った。

「塞草」という言葉は、「蕪城賦」以前には見られない。李善は李陵作と言われる「答蘇武書」(『文選』卷四十二)の「塞外に草衰う」を典拠として挙げている。

胡地玄冰、邊土慘裂、但聞悲風蕭條之聲。涼秋九月、塞外草衰。

胡地の玄冰、邊土 慘裂し、但だ聞く悲風蕭條の聲を。涼秋九月、塞外に草衰う。

引用部分に描かれているのは、李陵の住む北方の異民族の地である。ここには氷が張って、邊境の大地はひび割れ、悲しげな風が聞こえるばかり。九月には、城塞の外で草が枯れてしまう。この一節を参考にすれば、「塞草」とは、城塞の外、北の氷が張る極寒の邊境に生える草と解釋できる。「邊塞」の「塞」を形容詞的に用いたこの言葉は、邊境のイメージを帯びているのである。

形容詞のように體言に「塞」の字を冠する例は、鮑照の「代陳思王白馬篇」に見える。

埋身守漢節 沈命對胡封 身を埋めて漢節を守り 命を沈めて胡封に對す
薄暮塞雲起 飛沙披遠松 薄暮 塞雲起こり 飛沙 遠松を披おう

(鮑照「代陳思王白馬篇」、『鮑氏集』卷三)

男は漢王朝への節を守って、命を賭して「胡封」邊境の地に對峙する。この邊境の地に浮かぶ雲は、「塞」の字を冠して「塞雲」と表現されている。「塞雲」も他例を見ないが、表現しようとするイメージは、「塞草」と同じであろう。

一方、下の句では「沙」が飛んで、松の木を覆ってしまう情景が描かれている。邊境に砂が付きものであることは、鮑照の「代陳思王白馬篇」の本歌である、曹植の「白馬篇」(『文選』卷二十七)を見れば瞭然である。遊俠の徒が「少小にして郷邑を去り 聲を沙漠の垂に揚ぐ」、若くして故郷を去り、邊境の地で勳をたてるというのがこの作品の主旨であるが、その戦闘の場は「沙漠」である。邊境の戦いの背景として添えるのは、一面の砂漠であるという當時の認識が讀み取れる。

「蕪城賦」に立ち返れば、「塞草」が生える光景に、「驚沙 坐に飛ぶ」砂が飛ぶという描寫がある。砂漠かどうかはともかく、邊境に生える草とともに砂が描かれていることは、邊境を題材とする「白馬篇」兩作品との類似が見られると言えるだろう。

「塞」を冠した語と對をなすように、「蕪城賦」には「邊」の字を冠した「邊風」という語が見られる。末尾に付される「蕪城の歌」に、「邊風起りて城上 寒し、井徑 滅して丘隴 殘す」というのが、それである。

この「邊風」という語は、古い例は見られず、劉宋に降つて吳邁遠の「胡笳曲」(『藝文類聚』卷四十二)に見える。

邊風落寒草 鳴笳墜飛禽 邊風 寒草を落とし 鳴笳 飛禽を墜とす

異民族の笛と題される作品の中で、「邊風」が吹くと言うからには、邊境の風と解するのが妥當である。「答蘇武書」に「悲風蕭條の聲」というように、びゅうびゅうとふきさぶ風が、北方のイメージとして捉えられていたのだろう。

「邊」の字を冠する語の例は、鮑照自身の作品にも見られる。

既事轉蓬遠 心隨雁路絕 既に轉蓬に事えて遠く 心は雁路に隨いて絶ゆ

霜鞞旦夕驚 邊笳中夜咽 霜鞞 旦夕に驚き 邊笳 中夜に咽ぶ

(鮑照「王昭君」、『鮑氏集』卷七)

匈奴に嫁したという王昭君を歌った樂府作品に、異郷の地で聞く笛の音を、「邊笳」と、「邊」の字を冠する言葉で表現している。「邊」に「邊境の」という意味を持たせていることは、この例からも證明できる。そして、一句目に「轉蓬」とある。鮑照以前の六朝期の邊境を題材とする作品で、「蓬」を取り上げることは少ないが、この「王昭君」を参考にすれば、「蕪城賦」の「孤蓬 自ら振るう」という「孤蓬」にも、邊境の情景を體現する役割が與えられているのではないだろうか。また、霜の降りた太鼓に日夜驚かされるという「霜」も、邊境の風物と捉えることができる。

簫鼓流漢思 旌甲被胡霜 簫鼓 漢思を流し 旌甲 胡霜を被る

疾風衝塞起 沙礫自飄揚 疾風 塞を衝きて起り 沙礫自ら飄揚す

(鮑照「代出自蓟北門行」、『鮑氏集』卷三)

邊境における兵士たちを描いた作品であるが、軍旗と彼らがまとう鎧に霜が降る。先に挙げた「答蘇武書」に「胡地の玄冰」とあるのが想起される。強く吹く「疾風」と、それによつて巻き上げられる「沙礫」、これらとともに描かれる「霜」も、邊境の情景を表現する要素の一つと考えられる。前章で「白楊」と「霜」がともに描かれることについて言及したが、「蕪城賦」における「霜」は、邊境のイメージを擔う一要素とも言える。

つまり、塞、邊、蓬、沙、霜といった、「蕪城賦」の廢墟を描寫するために用いられている言葉は、すべて邊境を題材とする作品中に用いられているのである。「黄埃」が北方の情景に用いられる例は、六朝期には見られないが、「蕪城賦」に言う「直視す千里の外、唯だ見る黄埃起るを」という情景は、「飛沙 遠松を披おう」と同じく邊境を想起させる。

鮑照以前の邊境を題材とする作品は、地名や古の武將など固有名詞でもって、邊境のイメージを創出することが多く、間にさしはさまれる情景の例は多いとは言えない。しかし、五言詩に描かれた邊境の情景を總合したものが、「蕪城賦」に展開されているということは、邊境であることを主張する固有名詞がなくとも、その中に邊境のイメージを読み取ることができると考えられる。

三、五言詩に描かれる廢墟

「蕪城賦」には墓場と邊境のイメージが読み取れることを考察したが、當該賦の題材である廢墟は、五言詩においては如何に描かれてきたのか。この章では、五言詩作品の表現の型について述べ、その上で、「蕪城賦」の描く廢墟との共通點を考察する。五言詩の廢墟描寫には、荒廢の情景の中に動植物が描かれることが特徴的であり、その特徴は「蕪城賦」にも受け繼がれている。

廢墟を扱った作品として、曹植の「送應氏詩」が挙げられる。これは北へと向かう友人を送る作品であるが、續く戰亂によって荒廢した洛陽の様子を述べている。

歩登北芒坂 遙望洛陽山 歩みて登る 北芒の坂 遙かに望む 洛陽山
洛陽何寂寞 宮室盡燒焚 洛陽 何ぞ寂寞たる 宮室 盡く燒焚す
垣牆皆頓擗 荆棘上參天 垣牆 皆な頓擗し 荆棘は上りて天に參わる

（曹植「送應氏詩」其一、『文選』卷二十）

北芒山から洛陽を見下ろす。すると宮殿はことごとく燒かれ、垣根や壁はすべて崩れて、はびこるイバラが伸びて天につきそうなほどの光景が目に入る。建物の崩壊と植物の侵食によって、かつての華やかな都・洛陽の面影はない。

晉の張載の「七哀詩」では、實景として描かれていない分、廢墟の描寫の型が明確に読み取れる。北芒山にある陵墓の狀況を述べて言う。

園寢化爲墟 周墉無遺堵 園寢 化して墟と爲り 周墉 遺堵無し
蒙籠荆棘生 蹊逕登童豎 蒙籠として荆棘生じ 蹊逕 童豎登る

狐兔窟其中 蕪穢不復掃 狐兔 其の中に窟し 蕪穢 復た掃かれず

(菅) 張載「七哀詩」其一、『文選』卷二十三

曹植の作品と同じく、壁などが崩れて、ぼうぼうとイバラが生える情景を描寫する。しかし、先の曹植の詩には見られないものにも言及している。それは「狐兔」キツネやうさぎといった、廢墟に住み着く動物である。建物の崩壊と植物に加えて、都市に人間ではなく動物が住み着いていくさまも、廢墟を描く際のモチーフと見ることが出来る。

五言詩において「荒廢」とは、人の作った建築などの人工物が機能しなくなり、植物や動物などの自然が、かつて人が生活した空間に侵入してくる、こうした情景を描くことで表現されている、と言えるだろう。

それでは、「蕪城賦」の廢墟は、どのように表現されているのだろうか。以下に蕪城の様子を描く部分を引用する。

澤葵依井 荒葛冒途 澤葵 井に依り 荒葛 途に冒る（か）

壇羅虺蜥 階闕齷齪 壇に虺蜥 羅なり 階に齷齪 齷う

木魅山鬼 野鼠城狐 木魅 山鬼 野鼠 城狐

風嘯雨嘯 昏見晨趨 風に嘯え雨に嘯き 昏に見れ 晨に趨る

飢鷹彌吻 寒鴟嚇雛 飢鷹は吻（くち）を彌ぎ 寒鴟は雛を嚇す

伏暴藏虎 乳血滄膚 伏暴 藏虎 血を乳（ち）み膚を滄う

崩榛塞路 崢嶸古堦 崩榛 路を塞ぎ 古堦に崢嶸たり

白楊早落 塞草前衰 白楊 早落し 塞草 前衰す

稜稜霜氣 荊荊風威 稜稜たる霜氣 荊荊たる風威

孤蓬自振 驚沙坐飛 孤蓬 自ら振るい 驚沙 坐（すわ）に飛ぶ

灌莽杳而無際 叢薄紛其相依

灌莽 杳として際無く 叢薄 紛として其れ相い依る

通池既已夷 峻隅又已頽

通池 既に已に夷かに 峻隅 又た已に頽る

「蕪城賦」でも多くの自然のものが街に入り込んでいる。まず「鼯鼠^①」「野鼠^②」「城狐^③」「虎^④」「魑魅^⑤」「鷹^⑥」「鷗^⑦」といった動物が挙げられる。「城狐」に着目すれば、李善が魏明帝「長歌行」の「久城^⑧に狐兔を育み、高墉に鳥聲多し」を典拠として挙げる。狐や兔、鳥などの動物が住み着く情景が、廢墟を描くモチーフの一つであったことが、この「長歌行」からも指摘できる。「木魅^⑨」「山鬼^⑩」に至っては實在する動物と分類するよりも、精霊や怪物とした方が適當であろう。これらの生物が蠢き、弱いものを脅し、食らおうと襲いかかり、血をすすするさまは、「長歌行」が「久城に狐兔を育む」と表現する、動物が荒れ果てた市街に棲息するさまを、より強烈にグロテスクにした感がある。

建築物については、「通池は既に已に夷かに、峻隅は又た已に頽る」とあり、堀や城壁が崩れて平らになっているさまが描かれている。また、「蕪城賦」末尾の「蕪城の歌」には、「井徑 滅して丘隴 残す」と言い、ここでは整備されていた農道や墓の崩壊を詠う。

次に、先に考察した「白楊」「塞草」をはじめ、「澤葵」「荒葛」「崩榛」「灌莽」「叢薄」といった植物が見られる。「白楊」「塞草」はこの時点で枯れており、「灌莽」「叢薄」は、ぼうぼうとした叢が薄暗く廢墟を覆っている印象を与える。「荒葛」「崩榛」に至っては、道路に蔓延って塞いでしまっている。「澤葵」とはコケのことであるが、コケが井戸についてしまっているということは、この井戸が使われなくなって久しいのだろう。植物はただ生えているだけでなく、道や井戸を侵食している。それはここで長く生活が営まれていないことを表している。

以上から、五言詩に見られる廢墟描寫の特徴は、「蕪城賦」にすべて見られることが確認された。それだけでなく、賦という表現形態によるものか、より詳しく細かに廢墟のさまを描く。五言詩より奇怪さと醜さを加えた、よりグロテスクな荒廢ぶりを見せているのである。

四、「蕪城賦」に描かれた廢墟

「蕪城賦」の廢墟は、墓場と、邊境のイメージをも併せ持っている。それでは、この賦が描きだす廢墟は、どのような場所であると位置づけることができるだろうか。

本章では、はじめに墓場と邊境と廢墟の三つの場の共通点について考え、「蕪城賦」の都市から廢墟への「荒廢」という現象が、諸要素の都市空間への侵入であることを論じる。また他の五言詩と比較すると、「蕪城賦」の廢墟には人が現れない。「蕪城賦」前半の大都市の描寫と比較して、廢墟の無人状態が何を示すのかについて考察する。

まず、この廢墟・墓・邊境という三つの要素の共通点とは何か。前章で見たように、五言詩においては、廢墟は街にあった人工建造物が崩壊し、自然物がそこに侵食してくる情景、それを描くことによって表現されていた。廢墟に存在するのは、人が育てるような草木ではなく、人に飼われ

るような愛玩動物でもない、人には飼いならせない自然の集合であつた。つまり、侵入する自然とは、人が日常的に接することのない、都市空間の外に存在する自然である。

都市の外という點は、そのまま墓場と邊境にも當てはまる。第一章で引用した「古詩十九首」に、「車を驅る 上東門、遙かに望む 郭北の墓」(其十三)、「郭門を出でて直視すれば、但だ見る 丘と墳と」(其十四)とあるように、墓場は、町を圍む城壁の外にあつた。また、邊境は人々の生活する空間から隔絶した土地として認識されていた。「答蘇武書」は「終日 觀るもの無く、但だ異類を見る。」と述べ、邊境の地は、自分たちとは違う「異類」の地とされている。當時の人々にとって、邊境は自分たちの暮らす空間から、物理的にも意識的にも遠い場所だつたと言える。つまり墓場と邊境は、ともに都市の外にある場所なのである。

都市の外にある自然物が侵入してくるとき、墓場と邊境という二つの都市外の要素も、同時に都市に入り込んでくる。そのため、「白楊」という本來城壁の外に生えるものが、都市の内部に生え、黄色い埃が舞い、北方に轉がるという蓬が風によつて舞い上がる景色が、なぜか往時の大都市で見られるのである。邊境の城塞に生えるはずの「塞草」は、あまりの荒廢ぶりにもう枯れてしまつてゐる。「蕪城賦」の廢墟は、「荒廢」の場であるだけにとどまらず、「墓場」であつて、「邊境」であるという多面性を持ち、それらが相互に影響し合つた廢墟なのである。「白楊早落、塞草前衰」の二句は、廢墟であつて、ただの廢墟ではない「蕪城賦」の廢墟を、端的に表現していると言える。

さて、ただの廢墟ではない「蕪城賦」の廢墟だが、もう一つ大きな特徴がある。無人なのである。動物と植物は不氣味なほどに存在するのに、人の氣配は少しも感じられない。しかし、廢墟に人がいてもおかしくないことは、以下の例からわかる。

不見舊耆老 但覩新少年 舊耆老を見ず 但だ觀る 新少年

(曹植「送應氏詩」其一)

蒙籠荆棘生 蹊逕登童豎 蒙籠として荆棘 生じ 蹊逕に童豎登る

(張載「七哀詩」其一)

頽隴並壅發 萌隸營農圃 頽隴 並びに壅發せられ 萌隸 農圃を營む

(同右)

これらは、前章でも引用した作品の一部分である。街が壊れ草木が伸び、動物がうろうろしている街でも、人は確かに存在している。ここでの人の存在は、決して歡迎されているものではない。若者だけになってしまつて、昔の秩序ある街でなくなつたこと、農民によつて丘陵が開墾され

て、農地になっていくこと。これら人の存在は廢墟がもうかつての姿には戻りえないことを暗示している。しかし、人の存在を描く意圖は、ここでは問わない。むしろ重要なのは、五言詩が言及した「人」が、五言詩の型で「荒廢」を描いている「蕪城賦」では排除されていることである。人が一人もいない後半の廢墟に對して、前半は人が存在し、人が作り上げた都市を描いている。「蕪城賦」の前半部を概観していこう。

當昔全盛之時 昔 全盛の時に當りて

車掛轆 人駕肩 車 轆（車軸の先）に掛り 人 肩に駕す

塵閉撲地 歌吹沸天 塵閉（居住區）地を撲し 歌吹 天に沸く

華貨鹽田 鏹利銅山 貨を鹽田に拏くして 利を銅山に鏹る

才力雄富 士馬精妍 才力 雄富にして 士馬 精妍たり

故能修秦法 佚周令 故に能く秦法に移り 周令を佚す

劃崇墉 剗濬洫 崇墉を劃し 濬洫を剗し

圖脩世以休命 脩世を圖りて以て休命ならんとす

あふれるばかりの人とこつた返す車から、昔はとてもにぎわった大都市であつたことがわかる。鹽田で作つた鹽、銅山から得る利益は、この都市を經濟的に潤し、人材も豊富、兵士も馬も精銳ぞろいであつた。「崇墉」「濬洫」と言われる城門や池は、高度の技術でもつて作られたはずである。ここに描かれているものは、人が關わり人によつて作り出されたもの、人であつて初めて成し遂げられたものである。總じて言うなら、それはすなわち文明であると言えるだろう。經濟も高度な技術も文明都市に必須の條件である。

「蕪城賦」は前半では、人が作り上げてきた文明、それによつて構築された都市空間を描く。そして後半では、都市から隔絶されていた自然によつて侵食され、文明など跡形も無くなつた、無人の状態にある場所を描く。人の有無はそのまま文明の有無を表し、壯麗な建築や溢れかえる人の代わりに、廢墟を埋める奇怪なものたちが、非文明を體現しているとは言えないだろうか。

五、紀行賦における廢墟との相違

賦には「紀行」と分類される作品群がある。それは旅行記のように書かれ、隨所に廢墟古跡が詠みこまれている。この章では紀行賦を取り上げ、その中での廢墟とはどういった場所であるのか考へる。次に「蕪城賦」との相違を、歴史の有無という點から考察していく。

紀行賦の例として、班彪の「北征賦」を見てみよう。

登赤須之長坂	入義渠之舊城	赤須の長坂に登り	義渠の舊城に入る
忿戎王之淫狡	穢宣后之失貞	戎王の淫狡を忿り	宣后の失貞を穢れとす
嘉秦昭之討賊	赫斯怒以北征	秦昭の討賊を嘉し	赫として斯ち怒り以て北征す
紛吾去此舊都兮	駢遲遲以歷茲	紛として吾	此の舊都を去り 駢 遲遲として以て茲を歷たり

(漢) 班彪「北征賦」、『文選』卷九

引用したのは、「義渠」という異民族西戎が治めた國のあつた場所⁽¹⁾に立ち寄つた時の一段である。廢墟に到ると、「義渠」に關する歴史上の人物について述べる。この「戎王」「宣后」については『史記』に記述がある⁽²⁾。秦の昭王の母・宣太后は、當時義渠の地にいた匈奴の戎王と姦通し、二人の子供をもうけていた。太后は戎王をだまして甘泉宮で殺害し、そのあと兵をあげて義渠に進軍し滅ぼしてしまつた、と言う。この歴史事實について、作者は戎王に對しては批判の意を、秦の昭王に對しては贊美の氣持ちを示す。そして、心亂れながら長安を去っていく。

「舊城」と言うからには、その場所はすでに廢墟になつていたであらうが、「北征賦」においては、廢墟がどんな様子であつたか、ということとはさほど重視されていない。着目されるのは、廢墟がある場所にまつわる歴史である。つまり紀行賦では廢墟に到着すると、情景は二の次なのであつて、まずその地の歴史について語り、次に自身の心情を述べるといふ順で書かれる。紀行賦はこうした順番で書かれる一節が、いくつも連なつてできている⁽³⁾。

このような一節に据え置かれた廢墟は、人に歴史を語らせる契機となつてゐる。そして、目の前にある廢墟に向かつて、歴史が述べられるとき、廢墟はただの風化物ではない、意味のある場所になる。紀行の賦における廢墟は、意味を與えられた既知の場であると言えよう。

それに對して「蕪城賦」の廢墟は、未知であると言えるだろう。そもそもこの作品は、「瀟湘(廣々とした様子)たる平原、南は蒼梧漲海に馳せ、北は紫塞鴈門に走る。」という三句から始まる。この壯大な空間を描く冒頭のあと、特に固有の地名に言及することもなく、先に見た都市の繁榮の記述へと移っていく。舞臺になる都市は、位置も特定されず、固有の地名も冠されない。このことは、舞臺がどこであるのかを不明にし、また同時にどこであつてもよいという態度を表明するかのようである。

そして、華やかな都市について述べた後、「出入すること三代、五百餘載、竟に瓜と割け豆と分かる。」と言ひ、特に轉落の歴史が記述されることもなく、五百年後には、墓場の木が生え邊境の風物がそこそこにある奇妙な廢墟になつてしまふ。大都市と廢墟との間の時間がすつぱり抜け落

ちているのである。そして、不気味でおぞましい廢墟をこまごま描寫した後、一章で考察した漢賦を思わせる煌びやかな記憶が甦り、その直後、「蕪城賦」は以下のように言う。

天道如何 吞恨者多 天道 如何 恨を吞む者は多し

信じるべき天道を問うというのは、珍しい例ではないだろうか。『史記』伯夷列傳（卷六十一）の「天道、是か非か。」を思わせる言葉である。紀行賦のように歴史によつてその場所の荒廢について語るのではなく、天に問うということが、この都市の荒廢が歴史には解決不可能であることを物語っているのではないか。

歴史は人によつて伝えられるものである。紀行賦に見られるような、ある場所に舊跡としての意味を与え、歴史の記述と繋げて既知の場に變える、そうした廢墟に付される歴史は、人が知を集積する文明の上に成り立つものだろう。「蕪城賦」の廢墟に、人が存在せず歴史も記述されないということは、蕪城には場所に意味を与える「人」がいないために、この場所についての歴史が廢墟に付されることがないことを表している。つまり、荒れた廢墟がそのありのままに存在しているのである。紀行賦と比較すれば、この廢墟は意味づけのされていない、未知の廢墟であると言えよう。未知だからこそ、そのわからなさを埋めようとして、「蕪城賦」は廢墟を事細かに描寫し、記憶の片鱗を回想する。これまで考察してきた蕪城に現れる、不自然で奇怪なものや「回想」は、すべて廢墟が描かれるときの支柱となる歴史にとつてかわろうとするものであったのではないだろうか。

おわりに

本稿で、「蕪城賦」の舞臺とされる廣陵に言及しなかったのは、理由あつてのことである。『文選』の李善注に「集に廣陵故城に登ると云う。」とあり、從來劉宋期の廣陵に関する記事とあわせて、鮑照がいつこの作品を作ったかということに、主眼を置いて研究されてきた。

制作年代の研究は、史書の記述と作品の表現を根據になされる。「蕪城賦」の作品中の言葉も、今まで年代確定の論據として扱われてきた。それにしても、「蕪城賦」の言葉は、廣陵と制作年代にしばられすぎてはいないだろうか。一度その呪縛から解放して考察する、これが本稿のひそかな目的だった。舞臺を限定せずにこの作品を考えると、蕪城は多彩な様相を見せる。

もし蕪城が廣陵であるならば、この作品に漂う死と邊境のイメージは、吳王濞の時から続く殺戮の歴史と、劉宋期における軍事據點としての北魏との緊張關係が讀み取れよう。しかし、「蕪城賦」がとるどここの場所であつてもよいという態度は、そのままどこであつても蕪城になりうると

示唆するようでもある。どこであろうとも、死と邊境による蹂躪と隣り合わせであるという、六朝人の不安と諦めとが底流にあるような氣がしてならない。

注

本論文では、鮑照の作品については、『四部叢刊』所收毛斧季校本『鮑氏集』を底本とした。また、使用した文獻は、胡刻家重刻宋淳熙本李善注『文選』（中
文出版社）、『四部叢刊』所收『箋注陶淵明集』、汪紹楹校『藝文類聚』（上海古籍出版社）である。『文選』所收の作品の表記は、原則『文選』によった。

(1) 『宋書』卷五十一「臨川烈武王道規傳の劉義慶の條に鮑照の傳があり、鮑照字明遠、文辭瞻逸、嘗爲古樂府、文甚遒麗。」とある。

(2) 鍾嶸は『詩品』序において、「鮑照成邊」を「五言の警策」の一つとして擧げている。『詩品』序「陳思贈弟、仲宣七哀、叔源離宴、鮑照成邊、太冲詠史、顏延入洛、陶公詠貧之製、惠連擣衣之作、皆五言之警策者也。」

また江淹の『雜體詩三十首』（『文選』卷三十一）に、鮑照が「戎行」で取り上げられていることから、當時の鮑照に對する評價が讀み取れる。

(3) 「白楊」という語は、『文選』卷八の揚雄「羽獵賦」に「營合圍會、然後先置乎白楊之南、昆明靈沼之東。」とあるが、服虔注に「白楊、觀名也。」といい、建物の名であつて、植物としての「白楊」ではない。

(4) 「白楊」の語を用いる五言詩は、本文中に擧げた「古詩十九首」の其十三・其十四・陶淵明「挽歌詩」以外に、「豫章行」古辭・謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首」中の「平原侯植」がある。また鮑照自身の作品では、「代邊居行」（『鮑氏集』卷三）に「長松何落落、丘隴無復行。邊地無高木、蕭蕭多白楊。」とある。

(5) 「蕭蕭」の語は、『毛詩』では、「蕭蕭馬鳴、悠悠旆旌」（小雅 車攻）とあり、馬のいなくさまを形容するが、「風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還。」（『史記』卷八十六刺客列傳）や、「風颯颯兮木蕭蕭、思公子兮徒離憂。」（『楚辭』九歌 山鬼）とあるように、風の吹くさま、また木が風に吹かれる様を表す語でもある。

(6) 「孝武帝哀策文」（『藝文類聚』卷十三帝王部三）「龍旌鬱而青槐遠、驚葭亂而白楊翳。觀初霜之變條、聽秋風之下幕。」

(7) 李陵の「答蘇武書」については、富谷至氏の『ゴビに生きた男たち』（白帝社 一九九四）に詳しい。富谷氏によれば、漢代には西域を象徵する語は、詩文中では用いられていない。氏は李陵と蘇武をめぐる説話は東晉から南朝宋あたりに成立したのではないかと考えている。となれば「答蘇武書」と「蕪城賦」とはほぼ同時期に成立したことになる。

(8) 吳道遠は南朝宋から齊にかけての人。『南史』卷七十二に傳があり、「又有吳道遠者、好爲篇章、宋明帝聞而召之。」とある。また、『南齊書』卷五十二丘巨源傳に、巨源が袁粲に與えた書の中で、「吳道遠族誅之。」と言う。

(9) 「韓」は異民族の太鼓。宋本『鮑氏集』では、「韓」を「揮」に作る。今、遼欽立の指摘に従って『樂府詩集』、張溥本の「韓」に改める。

(10) 「轉蓬」や「飛蓬」などの「蓬」は、「遊子」や「征夫」の隱喩になる例がほとんどであるが、劉宋期の「仲秋邊風起、孤蓬卷霜根。白日無精景、黃沙千

里昏。顯軌莫殊轍、幽塗豈異魂。聖賢良已矣、抱命復何怨。」(王僧達「和琅邪王依古」)、『文選』卷三十一)や、「訊此倦遊士、本家自遼東。昔隸李將軍、十載事西戎。結車高闕下、極望見雲中。四面各千里、從橫起嚴風。寒燠豈如節、霜雨多異同。夕寐北河陰、夢遶甘泉宮。勤役未云已、壯年徒爲空。題知古時人、所以悲轉蓬。」(袁淑「效古」)、『文選』卷三十一)などは、邊境にまつわる人や情景とともに「蓬」が見られ、これらの「蓬」は、邊境の風物としても捉えることができる。

(11) 『黄埃』は、鮑照以前には謝尙の「大道曲」一例のみ。「青陽二三月、柳青桃復紅。車馬不相識、音落黄埃中。」(『樂府詩集』卷七十五)と言ひ、詩句のみでは、邊境を詠うと考えるのは難しい。また『樂府詩集』は「樂府廣題」を引いて「謝尙爲鎮西將軍、嘗着紫羅襪、據胡牀、在市中佛國門樓上彈琵琶、作『大道曲』。市人不知是三公也」と言ひ、この作品にまつわる説話になにかしら邊境との関わりがあるかもしれないが、この「黄埃」を邊境の風物として捉えられるかは不明。

(12) 「邊塞詩」の領域は未だ明確ではないため、本稿ではその呼稱を避けた。『唐代邊塞詩研究論文選粹』(甘肅教育出版社、一九八八)、王文進「南朝邊塞詩新論」(里仁書局、二〇〇〇)、松原朗「邊塞詩の出現―梁陳における邊塞樂府を中心に―」(『中國詩文論叢』二四、二〇〇五)などを参考にした。

(13) 顔延之「北使洛」(『文選』卷二十七)に「伊穀絕津濟、臺館無尺椽。宮陛多巢穴、城闕生雲煙。」とあり、建築の崩壊と、宮殿に動物の巢ができるさまを述べる。また同「還至梁城作」(同上)には「丘壘填郭郭、銘志滅無文。木石局幽闕、黍苗延高墳。」と言ひ、戰禍に遭った梁城は城の外も中も墓で埋め盡くされ、墓門は木や石で塞がれ、そこに黍が伸びる情景を描く。また七言ではあるが、鮑照「行路難」其十五(『鮑氏集』卷八)に「君不見柏梁臺、今日丘墟生草萊。君不見阿房宮、寒雲澤雉栖其中。歌妓舞女今誰在、高墳壘壘滿山隅。」と言ひ、柏梁・阿房の古の宮殿が、今では草が生え、雉が住むさまを歌って、「荒廢」を表現している。

(14) 『廣』はノロ。『毛詩』召南「野有死麋」に「野有死麋、白茅包之。」「說文解字」鹿部に「麋、麋也。」「鼯」は、李善注に「鼯、鼯鼠也。」「鼯鼠、夷由。」郭璞注に「狀如小狐、似蝙蝠、肉翅。」とあり、コウモリに似た動物。

(15) 『漢書』卷五十四蘇武の傳に「武既至海上、廩食不至、掘野鼠去中實而食之。」とあり、蘇武が匈奴の地で幽閉された際、「野鼠」を食べたという記述がある。第二章で述べた邊境のイメージはこの「野鼠」にも付されているという可能性がある。

(16) 「蟻」は人を射る蟲、短狐。『毛詩』小雅「何人斯」に「爲鬼爲蜮、則不可得。」「毛傳」に「蟻短狐也。」「鼯」は鼯のこと。『爾雅』釋魚に「鼯、博三寸。首大如擘。」「楚辭」大招に「鼯」と「蟻」が並列された例がある。「鼯蟻短狐、王虺鸞只。魂乎無南、鼯傷躬只。」

(17) 「久城」を現行『藝文類聚』(卷四十二)では「入城」に作る。

(18) 「山鬼」は『楚辭』九歌に「山鬼」があるが、女性的な神靈である『楚辭』の山鬼と、「蕪城賦」におけるそれとを同様のものとして扱えるかは不明。

(19) 「塵」は宋本『鮑氏集』では、「塵」に作るが、丁福林校注『鮑照集校注』に従って、『文選』の表記「塵」に改める。

(20) 「義渠」は秦の都咸陽の北西、現在の陝西省と甘肅省の境にある。『漢書』卷二十八地理志の「北地郡」の條に「義渠道」という地名が見える。秦と接していた義渠は、秦躁公のとき(紀元前四三〇年)秦を攻撃して渭陽まで侵入したが、のち徐々に秦に領土を奪われ、惠文王の治世には、義渠の二十五城が奪取されていたことが、『史記』の秦本紀(卷五)、六國年表(卷十五)、匈奴列傳(卷一百十)などから知られる。

(21) 「秦昭王時、義渠戎王與宣太后亂、有二子。宣太后詐而殺義渠戎王於甘泉、遂起兵伐殘義渠。於是秦有隴西・北地・上郡、築長城以拒胡。」(『史記』卷一百十匈奴列傳)

(22) 他の例として同じく『文選』卷九所收の班昭「東征賦」や、卷十の潘岳「西征賦」が挙げられる。「東征賦」に「遂進道而少前兮、得平丘之北邊。入匡郭

而追遠兮、念夫子之厄勤。彼衰亂之無道兮、乃困畏乎聖人。」と述べ、「北征賦」と同じ順序で記述されている。また、「おわりに」で「蕪城賦」の舞臺が廣陵とされてきたことについて言及するが、鮑照と同時代の謝靈運が著した「撰征賦」は、紀行賦の表現でもって廣陵を描いている箇所がある。「登高塚以詳覽、知吳淞之衰盛。戒東南之逆氣、成劉后之駭聖。藉鹽鐵之殷阜、臨淮楚之剽輕。盛几杖而弭心、怒抵局而遂爭。忿爰益之扶禍、惜徒傷於家令。」（『宋書』卷六十七）

(23) 最近では、土屋聰の「鮑照『蕪城賦』編年考」（『文學研究』一〇四、二〇〇七）があり、制作年の新説を提出されている。本稿で着目した「白楊早落、塞草前衰」という二句は、土屋論文では冬という季節を確定することに、一役買っている。

(24) 前漢吳王濞の吳楚七國の亂（『史記』）、後漢賊張嬰の反亂（『後漢書』）、東晉末孫恩・盧循の亂（『晉書』）などが、廣陵に關する戰亂として擧げられる。